
僕が広げた両腕の中で

蒼惟 宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が広げた両腕の中で

【Z-コード】

Z2237D

【作者名】

蒼惟 宙

【あらすじ】

僕には好きな子がいる。だけどその子は、僕と同じ男の子・・・

「ねえ、明純^{あづみ}?」

僕は重くなつた瞼を持ち上げ、夢うつうに声がした方を見た。

「次、隣に移動だよ?」

「…ああ。そうだね。ありがとう、菜月^{なつき}。」

そう言うと、菜月は無邪氣な笑顔になつた。

早く早くとセーターの袖口を引っ張る姿に、なんだか母性本能の様なものが芽生える。感覚的には、兄だろうか。

「もお菜月、そんなに引っ張つたら伸びるでしょう?」

「だつて、明純がゆつくりなんだもん。」

ふくつと頬を膨らませる。

16にもなる高校生にしてはかなり幼さが残るこの子、菜月は、比例した様に背が低く、先月の体力測定で155cmという何とも可愛い結果が出た。

本人はそれなりに気にしているらしく、毎日牛乳を飲み、尽力している。

お菓子が好きで、毎日の様に食べているのに全然太らず、体重は約35kgほど軽い。

『明純^{あづみ}?』

いつもニコニコと笑つていて、人懐っこい。

小さじときからずつとそう。

泣き虫で、何にでも一生懸命で、明るくて、笑顔が・・・・可

愛い・・・

『明純?』

はつと声がした方を見ると、菜月は首を傾げていた。

「あ、ごめんね。行こうか。」

「うん?」

満面の笑みで答えてから、菜月はスキップして教室を出た。

「・・・まつたく・・・」

人の気も知らないで・・・

僕は思わずふふっと笑ってしまった。

「早く～！」

「はいはい。」

僕、吉田明純16歳。

幼馴染の岩田菜月16歳に片想い中です。

「吉田君たちって、いつも一緒にいるよね。」

掃除の時、簞で教室の床を掃いていると同じ班の女子が話しかけてきた。

彼女とは何度か話したことがあるので、あまり戸惑わなかった。僕は比較的女子が苦手だ。

「ん? うん・・・」

「あれ? たちつてだけで誰か分かるの?..」

自分から訊いたにも関わらず、彼女は目を丸くする。

「え? 菜月のことじやないの?」

そう言つと、面白そうに彼女は笑つた。

「やつぱりねー。仲良いんだ?」

「まあ・・・」

「ねえ、いつから仲良いの?」

「えつと・・・幼稚園入る前・・・・・・くらこかな。」

「すつこー」と言つて、彼女はほしゃいだ。

「てかや、吉田君つてモテるじやん?」

「え、そうなの?」

「そりだよお。なのじさ、女の子と歩いていると一回も見たこと無

いしー。」

女の子苦手なんだよね。なんて、彼女に向かつて言ふないか・・・。

「うん・・・まあ・・・」

「好きな子とか、いないの?」

「えつ・・・」

その言葉に、僕はどきつとした。

彼女は目をきらきらとさせる。

「え、なに? ーーの? ーー

「い、いない・・・」

「「うわうわーー今ちよつとビビりましたでしょーー！ね、誰？秘密にしとくしとー、教え」

「「ハハーー、そーじしるよ、そーじつー」

ちよつと僕のクラスの担任である女性の教師が入ってきた。

「もあせんせー タイミング悪いー。今ちよつと事情聴取中だったのにー。」

「「わつこつ」とはやるべき」とが終わってからー。ちよつちよと終わらせちやつてよー？先生今田用事あんだから。」

「デートですかー？！」

「ばかもんつ。」

「きやーつ

・・・女子つて怖い

僕は掃除を再開した。

「好きな子・・・か。」

僕は後片付けをしながら、くすつと笑みをこなす。

「あーずーみーつ！」

鞄を手に取ると、教室の入り口で菜月が満面の笑みで手を振つている。

「そーじ終わつたー？」

「うん、終わつたよ。」

「じゃ、帰ろうよーつ

「・・・そうだね。」

菜月に腕をひかれ、教室を後にする。

「今日ねー、家で焼肉するのつ。母さんが、たくさんお肉あるからあつちやんとこも呼びなさいつてー。」

「あ、そつか・・・。分かった。」

僕はちやんと返事をしたつもりだったが、菜月は首をかしげた。

「どしたの？」

「ん? なんで?」

「だつて明純、元気なさそーな声してるよ?」

僕はまたどきつとした。そんなに、分かり易いだろ？

「なんでもないよ。」

「ホントに？』

「うん。』

僕が微笑んでみせると、菜月はぱつちりとした目で少しの間僕をじつと見上げていたが、やがて笑つて「そつか」と言った。

・・・いつかは、言わなければいけないだろ？

・・・僕にどうじる？

「ねえ、明純～、入らないの～？」

「う・・・ん・・・・・・・・」

「ここは菜月の家。

家族で呼ばれて、母さんと僕と姉さんは岩田家で焼肉を～」馳走になつた。

今、母さんたちはリビングで話をしている。

そして僕と菜月は・・・

「ねえ、嫌？」

「い、嫌なわけじや

「何やつてんのあんたたち、お風呂場の前で。」

廊下で押し問答していると、姉がいつのまにか近くに立つていた。

「あ、さつちやん聞いて～。」

「なあに～？」

姉は昔から菜月を自分の弟みたいに可愛がつて甘やかす。

「あのね、明純がね、僕と一緒にお風呂は入つてくれないの。」

「まあ、そうなの～。ちょっとアズ、あんたなんで菜月ちゃんに入つてあげないの？！」

・・・この豹変ぶり。

「ほら見なさいよ～菜月ちゃんのこの子犬のような瞳～。」

そこ？

「お風呂～ぐら～い、つい最近まではじょつけゅつ一緒にだつたじやない。

つい最近は一年前も入るのだろうか？

「明純～。」

「アズ、何恥ずかしがつてるの～そりゃあ菜月ちゃんは可愛いけど、同じ男の子じやない。裸の付き合にしなむ～。」

姉ちゃん・・・それはちょっと・・・

突つ込みたいことはたくさんあるが、突つ込むとどうなるか分かつものではないので承諾する。

「・・・分かった。菜月、入るうか。」

「わーいつ

「・・・。」

可愛い・・・

「良かつたね～菜月ちゃん。じゃ、アズ、ちゃんと洗つたげなさいよ?」

そう言うと姉はすたすたとリビングに戻つてしまつた。

「・・・マジかよ・・・」

「ほらほら明純！」

「あ、うん・・・つて早つ！」

菜月はもうすでに服を脱ぎ终わり、お風呂場に足を踏み入れていた。

「・・・ああ・・・」

大丈夫だらうか、僕。

上せないよつにと祈りながら、僕は服を脱いだ。

「ほら見て見て！今日は泡のお風呂～」

「ほ、ホントだねー。」

僕は一瞬イヤな予感がした。が、それを振り払つて入つていつた。

嫌な予感は、別のところで的中した。

「お風呂楽しかったね～」

「そうだね。」

なんとか上せざには済んだものの、泡を楽しむ菜月が濡れて大変だった。

まあでも、慣れたものだ。

「あら、やつと上がったのねー。お風呂どうだつたナツ?..」

「気持ちよかつたよ～ 明純といっぱい泡で遊んだのー。」

「そう、良かつたわね。あつちゃん、ありがとね。」

「あ、いえ・・・」

まだ若い菜月の母親が微笑む。

リビングを見渡すと、母と姉の姿が無かつた。

「あ、あの・・・」

「ああ、2人ならこれから映画見に行つて、明日から三連休だから旅行に行くつて言つてたわよ?」

「え、あ・・・ そつなんですか・・・。」

母と姉が突然出かけることは、もう昔からのことである。

「それでね、おばちゃんもお誘いしてもらつちやつたの～。だからあつちゃん、家に泊まつてくれないかな?」

「えつ・・・?」

これは予想外。

「で、でもそんな

「あら、遠慮なんていらないわよ～。昔から毎日のようにお互いの家に泊まつてたじやない。それに、あつちゃんがいてくれたらおばちゃん安心だわ～。」

「明純、泊まるの～?」

なんだこのダブル攻撃。

僕は一応微笑んでみるものの、内心困り果てた。

確かに前まではお風呂も泊まりも普通だつた。

だけど菜月を好きになつてから変に恥ずかしくて、なかなかできない。

「あ、お風呂上がつてた？」

背後から突然母の声が聞こえて、俺はビッククリして振り返つた。

「か、母さん。なんで急に旅行なんて・・・」

「あら、前から言つてたじやない。行くかも~つて。」

「不確かじやないか。」

「何よアズ、あんた女3人のんびり楽しんできひやダメだつて言つり？」

「姉まで参加してきた。

もひづじょうもない。

「・・・楽しんできてね。」

やつた」と、姉と両家の母が手を取り合つて喜ぶ。

「じや、よろしくね」

そう言つて3人はリビングを出て行つた。

僕の家も菜月の家も片親だし、好きなことくらいにしても良いことと思つてゐる。

だけど・・・なぜ・・・

「一緒に寝ようね？」

「う、うん・・・」

なぜこの可愛い生き物を置いていく?

昔から菜月と僕はセットで、菜月の世話を僕がしてゐた。

だけど今は状況が違う。

・・・でも・・・

「ま、いつか。」

いつも通りにすれば良い・・・か。

寿命が縮むかもしねないが。

「ほら菜月、いじめしてるよ?」

「んむ～・・・眠たい～」

僕もだよ。

と思つたが言わないのでおいた。

昨日の夜

母たちが出て行つてから菜月が僕を部屋へ引つ張りこみ、トランプ

だのテレビゲームだの色々した。

その内、菜月がうとうとじだした。

『あ、ちょっと菜月・・・』

倒れ掛かってきた菜月を慌てて支える。

『眠たいの?』

つて言つてもまだ10時だけど・・・

『・・・んー・・・』

目がほとんど閉じかかっていて、コントローラーを持つ手にも力が入つていらない。

『眠いんじょ?・・・もう寝る?』

『やだあ・・・』

菜月はそこだけはつきりと答えた。

『やだつて・・・でももう半分寝かかつて

『だつて明純が・・・』

僕?

『明純が・・・いるから・・・』

『つ? !』

思わず赤面してしまつた。

いきなり何を言い出すこの子は・・・。

『だ、大丈夫だよ。まだいるから。』

『・・・ホント?』

寝ぼけているのだろうか？ とろんとした顔で僕を見上げてくれる。

『うん。 だつて

『ずっと・・・一緒に・・・・・・・・・・

・・・え？

菜月はそのまま眠ってしまった。

固まつた僕の耳には、菜月の寝息と、ゲームの音。

『・・・どういう意味・・・？』

訊いてみるが、もうすっかり眠りに入つてしまつて何の反応も示さない。

僕は心配になるほど軽い菜月を抱き上げ、ベッドに入れた。布団をかけて離れようとすると、服の袖を掴まれた。

『なに・・・・・・え？』

菜月は眉根を顰め、寝ているはずなのに今にも泣きそうな顔をしている。

僕はすぐ『一緒に寝ようね』と約束したこと思い出し、菜月の隣に寝転んだ。

するとすぐに菜月は僕に抱きついてきた。顔がかつと熱くなり、鼓動が早くなつた。この熱と音で菜月を起さないだろうかと心配になるほど。

僕の胸元にある菜月の顔を見ると、わざとは打つて変わつて、幸せそうな顔をしていた。

『・・・あ・・・・・す、み・・・・・・・・

むにゅむにゅと僕の名前を言つ姿が可愛くて、僕はさつと頭を撫でた。

・・・のこと、覚えているだろうか。

僕は思い出すだけでぞきぞきしてしまつ。けれど菜月はけろつと・・・は、していなものの、寝ぼけた顔はいつも通りだ。よし、訊いてみよう。

「な、なあ菜月・・・」「ん~？」

パンを咥えたまま、また寝そうになつてゐる。

菜月はかなりの低血圧なのだ。

一 昨日の夜のこと、覚えてる? 部屋行ってから、しほりくじり・・

菜月は首をかしげていたが、やがてはつとした顔になつた。

「そういえば……僕……」

「うん？」

亦不怪^タ前は癪女^タだ

۱۷

期待にしてませんでしたよ
にして

口を尖らせる菜月を見ていたら、なんだか可笑しくなつてしまつた。
まあ・・・良いか。

「明純」

「ん？ なんだ？」

「一、二、三、床に零しちやつた……」

「マジか？！」

とにかく早く起きてくれ、菜月……

暖かい日差し。寝不足な僕は思わず「ひつ」としてしまひが・・・

「あ～す～み～つ！」

やんちや坊主が寝かしてくれません。

「どうしたーつ？」

離れたプランthouseに座る菜月の元へ駆け寄る。

菜月は足をぶらぶらさせながら口を尖らせていた。

「どうした菜月？」

「アイス食べたい。」

「え、アイス？」

「それからチョコ」とおせんべいとアイスとチョコと

「分かつた分かつた・・・」

昔からこうだから、ね。

「わあい」

さつきまでの顔はじりくやら、ニシthouseの笑顔を僕に向けてくる。

「早く行こーっ」

「うん。」

服の裾を引っ張られ、公園を出る。

「お金はちゃんと持つてきてるの？」

「うんっ」

道を歩きながらたずねると、菜月はズボンのポケットから小銭入れを取り出し、中身を手のひらにあける。

「はいっ」

さつと見たところ全然足りない。

「な、何円あるの？」

「えつとー・・・」

一生懸命数える菜月の真剣な顔に思わず見惚れる。

「・・・円」

「んなに小さいのに、どうしてそんなに突然綺麗な顔するの？・・・

「250円だつてば！」

「ほんやりしていると、突然大きな声がした。

僕がビックリして見ると、菜月が小銭ばかり乗つた手を僕の方に差し出している。

「あ、ああそうなの・・・。でも、足りないんじゃないかな？僕が足してあげようか？」

「あ・・・・・・」

菜月が一瞬表情を無くして固まる。僕は首をかしげた。

「ん？なに？」

「・・・ううん、なんでもないつ。足してくれの？！」
また笑顔に戻り、そう訊いてくる。僕が「いいよ」と答えると、嬉しそうにスキップし始めた。

しばらく歩くと、やがてコンビニが見えてきた。

中に入つて、菜月の後を追つてお菓子のコーナーに向かう。

「あれ？吉田？」

声がしたほうを向くと、同じクラスの男子が何人かいだ。

「あれ？何、この辺？」

「うん。少し歩いたとこ。」

「あーつ、吉田君だあ。」

また別方向から声がする。振り返ると、数人の女子がいた。

「たくさんいるんだね。今日何かあるの？」

「なんかこここの隣町で祭りあるらしくてよー。」

「へえー・・・・・」

そうだ。そういえばお祭りがあることをすっかり忘れていた。

「明純〜？」

お菓子のコーナーから、幾つかお菓子やアイスを抱えた菜月が出てきた。

「よつ。岩田も一緒か。」

「なんだよ岩田、大量だなー。」

「 もや～ 岩田君可愛い～ 」

「 頭撫でる～ 」

女子が菜月の頭を撫でたりしている。

背が低いのと顔が可愛いためか、女子にはけつ じつ 菜月を小動物みたいに扱う子達がいる。

僕はそれを見て少し・・・いや、けつ じつ イライラとした。

「 吉田もさー、 大変だな。 」

「 岩田のお世話係みたいになつてるもんな。 」

男子がそんな感じのことを話しかけてくるが、僕はイライラに邪魔されてよく聞こえず、「ああ」とだけ答へ、菜月の腕を引っ張つた。

「 ほりおいで。 ジゃあね、みんな。 」

「 おつひ。 ジゃあなー。 」

「 ばーばーい。 」

その時僕は、菜月の表情にまったく気が付かなかつた。

僕はずんずん歩いた。

ここは駅が近いため、祭りに行くらしい人がちらほら見えた。無性にイライラする。こんなに怒りに似た感情を覚えたのは……。そういえば、今までにも何度もあった。菜月が誰かに頭を撫でられたりして、笑っているとき。僕以外の誰かと喋って、楽しそうにしているとき。

僕の中に安心して見守る気持ちと隣りあわせで、もやもやとしたものがあった。

それは僕をイライラさせるもので、嫉妬なのだと今よみやく思い立つ。

菜月の家に着くと、僕が鍵を持っていたので開けて、中に入った。菜月の部屋に上がる。

そこでよみやく、僕は菜月がヒトコトも喋っていないことに気がついた。

「菜つ……き……」

振り返るが、そこに菜月はいない。

台所にアイスを置きに行つたのだろうか……？

菜月が、1人で？

僕は階段を下り、台所に入る。

「・・・菜月？」

菜月は台所について、暗い中でアイスを冷凍庫に入れていた。

「電気つけないのか？」

僕は訊きながらスイッチを押す。

菜月は泣いていた。

「どうしたんだ菜月？！」

僕は慌てて駆け寄った。

菜月は肩を揺らしながら冷凍庫の扉を閉め、チョコなどを流し台の

下に入れだした。

僕は恐怖と同種の不安にかられた。

「・・・菜月・・・?どう

「あず・・・は・・・」

嗚咽を漏らし、菜月が口を開く。

「ん?」

「僕・・・が・・・面ビ・・・なの?」

「・・・え?」

とんでもない言葉が飛び出す。

「ど、どうしたんだよいきなり?」

「だ・・・て・・・さつき、コンビニ・・・で・・・言つてた・・・

・・・

僕はコンビニでのことを思い返してみる。

「・・・菜月・・・分からないよ・・・教えて?」

「つ?!

菜月が目を見開いて、真っ赤な顔を僕に向かた。
そしてキツと僕を睨み付けて、台所を走り去った。

「菜月!」

僕は慌てて追いかける。2階の方で乱暴にドアが閉められる音がする。

駆け上がって、ドアを開けようとする。

「だめ!!--」

中から涙声で、菜月が叫んだ。僕の手が止まる。

「・・・明純・・・入っちゃダメ・・・」

すぐドア越しに聞こえる言葉に、僕は大人しく従つた。

中から聞こえる嗚咽に、ギリギリと胸が締め付けられる。

僕は少しどアの前に座つて、待つことにした。

どれくらい待つただろうか。

待つ時間というのは実際過ぎた時間よりも長いものだけれど、事実僕は30分近くドアの前に座っていた。

いつしか菜月の嗚咽も消える。

「・・・菜月？」

僕は声をかけてみた。

自分でも驚くほど弱々しい声に、菜月からの返事はない。

「・・・入つても良いかな？」

泣き疲れて寝ているのかもしれない。

もしそうなら、ドアのところで寝てしまっているのかも・・・

風邪をひいてしまつ。

「コンビニで・・・」

立ち上がり、ドアノブに手をかけたとほぼ同時に、菜月の鼻づまりの声。

耳を澄ませる。鼻をする音と、大きく息を吐き出す音。

「吉田も大変だなつて・・・お世話係みたいつて言われたときにも純、ああつて答えてた・・・。」

僕は自覚できるほど田を見開いた。鼓動の音が体中に響いた。

あの時、聞こえた言葉の意味を理解せずに曖昧に返事をしてしまつたことが、ここまで菜月を・・・

「・・・『めん菜月、あの時は

「今日だけじやないよつ」

菜月の叫びに、言葉を失つ。

今日だけじや・・・ない・・・?

「最近、明純おかしいよ・・・つ。いつもまーつとしてて、僕と眼が合うと逸らして・・・前みたいに泊まってくれないし、お風呂も一緒に入ってくれなくて・・・・・・僕が・・・面倒になった

の
・
・
・
?

菜用の声が低くなる。

「僕たちは嫌われたの？」「もう一緒にいるの？」
「嫌な

僕は思い切りドアを開けた。

菜戸が慌てて振り返り、ひくりした顔で僕を見上げている。

「子供は心地よい。」

反動でドアが戻つてくる音が、変に大きく聞こえる。

力心打數は牙魔され
声半微かに震えている
用意

菜月が泣きはらした顔を、苦くねがめる。

僕は狂つてしまいたくなるほど、悲しくなつた。

傳の如きは、思ひがけず、萬葉傳の如きである。

だけど、想いは・・・言葉は止まってくれない。

「菜戸のことが好きなんだ！ 『親友』としてじゃなくて、恋愛対象で

菜園が固まりて、まつばーふ。『サザニ葉は葉り歳廿二』。

「・・・困るかもしだいけど僕・・・いつからか菜月を、1人の

人として好きで……たけと僕男たし
菜戸たて……そ

目頭が熱くなる。

自分が情けなくなつてきた。

モウ言葉が恋へない。
一キ 奈美がハガ
莫月

菜用の視線を感じ、僕は顔を見られたくないで、背けた。
しばらく沈黙が続く。

僕は少し落ち着いて、謝ろうと顔を菜月に向かなおすと、菜月は両手を広げていた。

「・・・手・・・」

菜月は小さく呟いた。

「・・・めいっぱい・・・・・広げてください・・・・・」

少し目を伏せ、続けてそう言つ。

僕はよく分からずに、そろそろと腕を両側に開いた。

そこに、菜月が飛び込んできた。

僕は驚いて見下ろす。

見慣れた小さな頭があり、菜月はぎゅっと僕に抱きついていた。

「はい・・・閉じてください・・・・・」

僕はゆっくりと腕を閉じる。

小さくて暖かな菜月を、そつと抱きしめた。

少しの間、無言になる。僕は緊張よりも絶望よりも、今はただ菜月の温もりに癒された。

「・・・これが、僕の答えだよ・・・」

顔を横に向けて、菜月はさらさらと力を入れてから静かに言った。

僕はその言葉に、忘れていたんじやないかと思つた涙を流し、止めていたらしい息を大きく吐き出して、壊さないように力強く菜月を抱きしめた。

やつと・・・僕の腕の中に。

僕の大切な菜月が、大好きな菜月が、想いと一緒に、僕の腕の中に・・・

. F i n

「明純～つ、林檎飴買つて良い～つ？」

「ちょっと菜月、そのカキ氷食べ終わつてからにしないと・・・」

夕闇がせまる空。縁日らしい賑やかさの中で、僕は改めて菜月のす

ごさに苦笑いさせられる。

僕たちは祭りに来ている。

けつこう大きなお祭りで、出店もたくさんあるし花火も上がる。

「はいっ」

いつのまにか手に2本林檎飴を持っていた。

「ありがとう・・・」

僕はそれを受け取り、それから菜月の手を握りしめた。

「花火が始まるよ。」

「ホント?! ジャあ、早く行こ!」

菜月もぎゅっと握り返ってきて、楽しそうな笑顔を僕に向ける。

僕たちは川原へと走り出した。

繋いだ手には、力を込める。

はぐれないように。・・・

ずっと一緒に、いられるよう。・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2237d/>

僕が広げた両腕の中で

2010年12月30日01時20分発行